筆の跡集

911.3
7

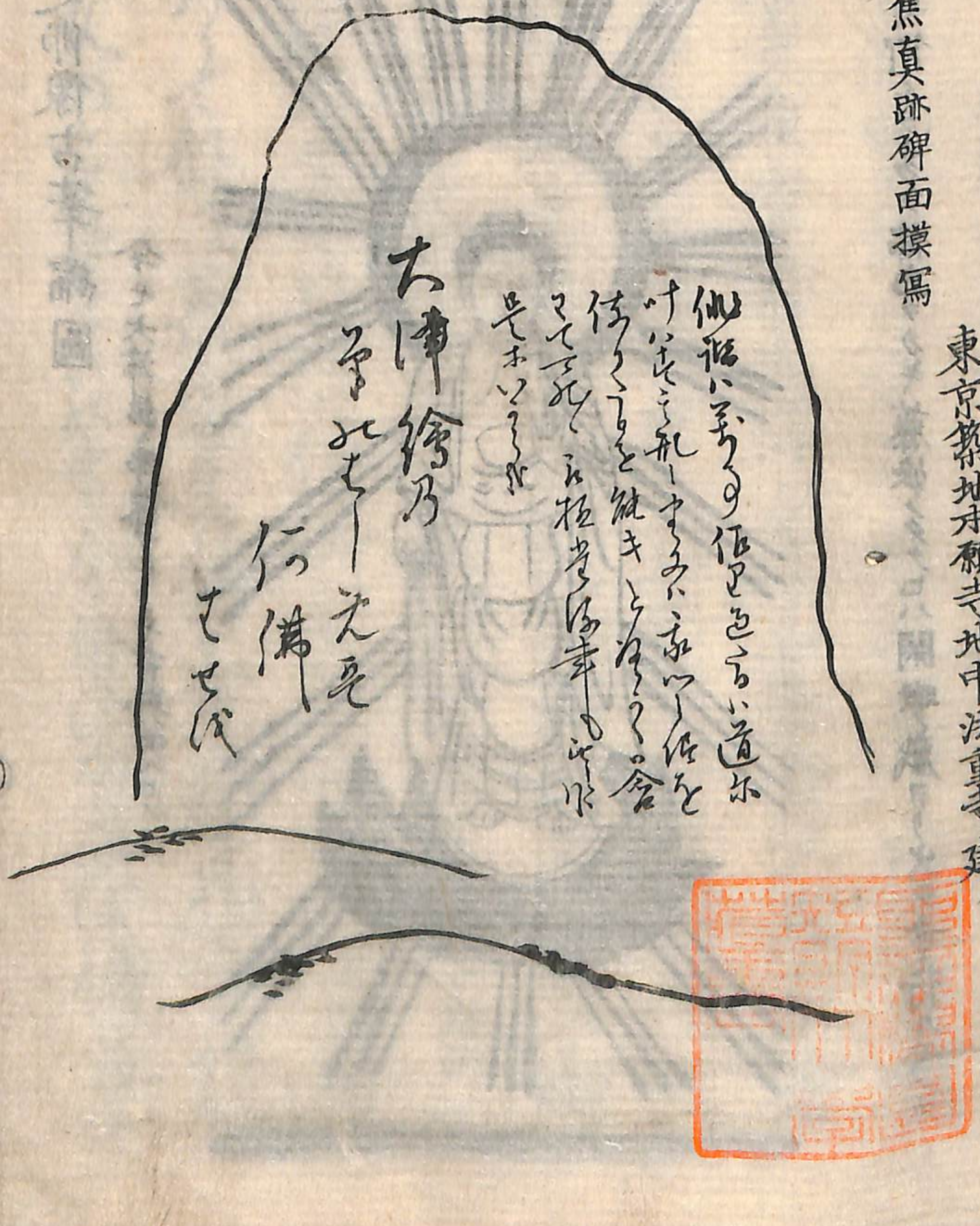
芭蕉翁二百回取越追遠譜

筆之跡集

明治九年十月藏梓

芭蕉真跡碑面摸写

東京築地本願寺地中法重寺建ル



大津繪之佛像古筆縮圖

今モ大津畫ニ佛像アレトモ古風ハ失ヘリ

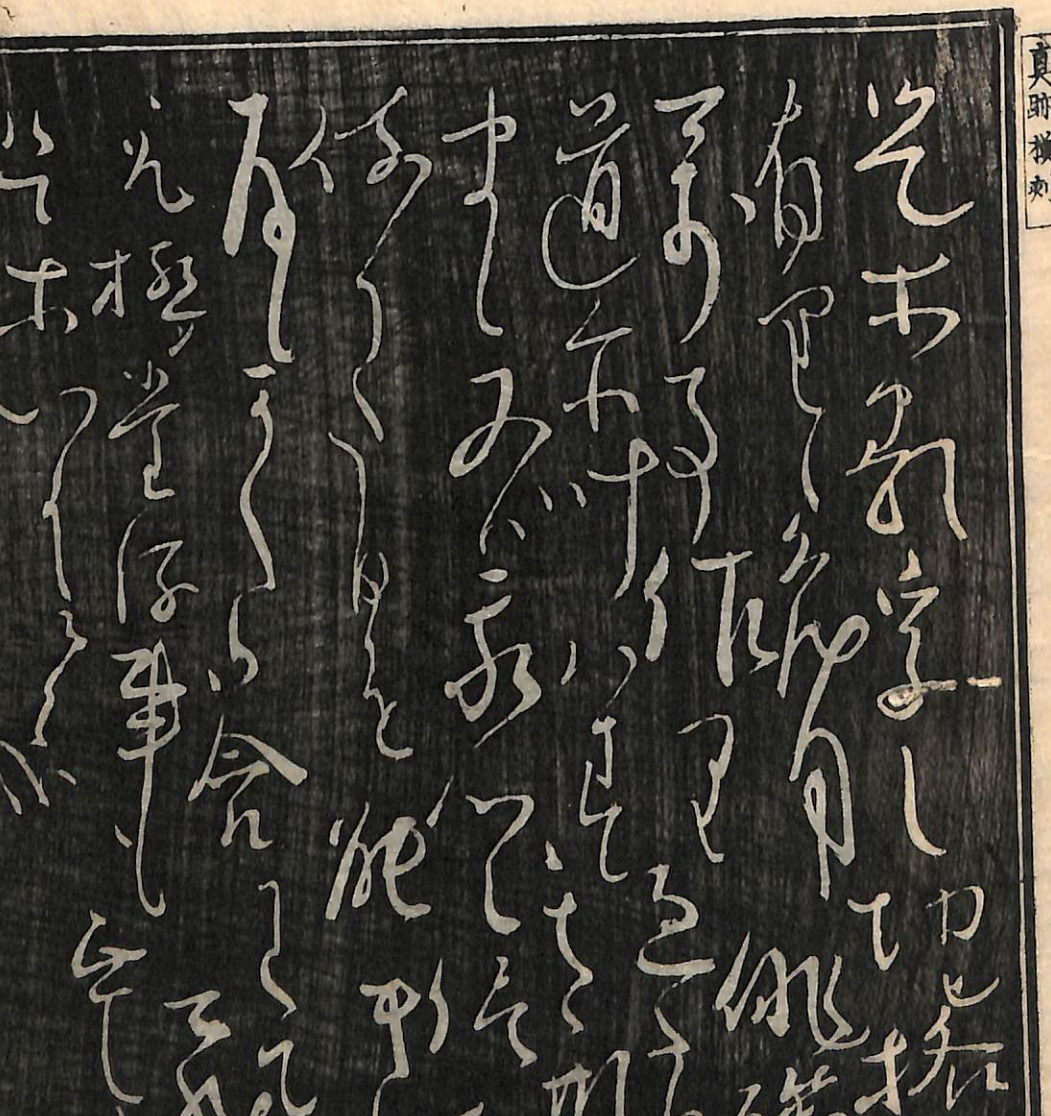
按ニ昔ヨリ佛像ノ三真何シテ多ク佛畫ヲカキ藤娘ノタクヒハ開眼ノ戯ヨリ出テ世ニ行ルモノカ

四番

佛ハとも大谷廼是也なりしと云傳へり聖武皇帝御宇
二百五十四年之後忌者遠き明治五年に至り築地
本願寺境内に鎮座ましま寸霊像にかはらすことを求
二月限を巳の證を奉る者有志の人にそ
依頼して其庭前に此代つき桜樹ありし碑面と
相したる宿縁を思ひ出させしも芭蕉翁の大
津絵乃筆はしめ何佛と讀へつましかれは
故ありて外り其ひと字一無を余の秘蔵せしより
其文のまゝにてそれまゝを用ひ句文代信字と

成て真跡を摸写し碑面に調刻して是を
建しより七年の星霜を經るにこゝに本坊
堂再造営なれハ峙て碍なるに似たり故に
境内清浄なる堂の傍に移して再建なり大
津絵の古事を記すに元禄句集乃うち大津
繪に画讃して詠る句さゝやかに一つふたつもあり
又俳諧日本國といへる冊紙を見れハ其書に
　暮てはつく　薪割家　と書たる
追分の繪佛に後世を任せよ　やとあり

いつの頃か俳ゝ俗家のまゝにて念佛をとなへ
なから世わたる業のいとなみハ殊勝なる境
界とそ云なるへし　追分の繪佛といふも此時代
よりおこり免許の本号を安置する所を称ふに
して只大津絵乃佛像を求て家々の壁に
かけて称名供養をなしける事となへ
芭蕉翁も素より念佛行者にして仏頂
禅師の門といふ書ハ雲竹に学ひ俳諧ハ季吟を
慕ひしと按元禄年間の好文神の如く思ひ有



真跡摸刻

情ありてこそやはらかに此翁の道證也となん又は
詩哥連俳乃唐土やまとにわたり風交のよしみ
浅からずつどひ俳諧を修学して勧善懲悪世話
を悟る修身の教法や好士に告て翁のやさ
二百回忌とやらは遠忌を引あげ供養せん
を遂ことにのぞむ者は大坂天満山のたよりし之

明和九年十月十二日

大津絵の筆のはしめは何仏　翁
[illegible]御手井　大[illegible]
[illegible]鶴[illegible]　[illegible]山
[illegible]揃[illegible]　枕[illegible]
[illegible]下[illegible]の[illegible]　沙山
[illegible]秋[illegible]　晴山
[illegible]居[illegible]出[illegible]の出来　蕉[illegible]
先祖の[illegible]筋[illegible]　石叟
[illegible]言[illegible]輝　[illegible]之

脇起

大津絵の
筆のはしめは
何仏
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

雑水を運ぶいとまに夜寒　芳泉
吉様の折しも落る桜まし　精知
寺社城りのきえてきめぬ　包郷如
名月にあれ頼ほ和きめつゆすま　華雄
かんとく雪家地に構の小屋　素水
吉色と程よい勝無とは老て　妹甫
落しし上手にちや無内烟　樹徳
幸羽の桜植にも名合して　等哉
人好勢の寒も花としし　長山

甚雨にも市も遠さ蒼野鳥の祥　北宜
長法はとめりて守鳥やぶ羽　卅舎
大抵な役年の門前へ三時節　守山
宵屋に筋と袖てちまちつ縁　富水
諸綱の国録まきり取かまり　五休
京色粉の原汁物けれもは　瑩笠
春年の果て花やは行路まて　禾嘯
折りむのなりけり勝羽の雲　呉仙
涅槃縁始終志門にかたに主樫　晩香

鳥渡の中にも竹婦人以上　鶏下
松杉乃深き緑も月明り　京梅
赤豆信の稲草姫　而秀
来小袖の身巾の広い国名　桂花
新暁家ゝふる違ふ家の雛　千畝
手引ゝて深く下れ蝶の行衛　雪松
偽筆乳臭の指に紙時　蕉花
咲春の中往通りの一里町　春湖
鳴鐘明ぬ夜錦岸之　稲葉

山城

長ゝみゝ紫さし荻見ゆ　芥舎
初月や声ゝ鴨搗ゝて人も　九起
芥子菜の咲きよかれ牡丹哉　文浪
猿尾早又薄蓮の作り哉　漁藻
菜の花や門にも水を　百可
閑ゝ　拾山
中ゝよ蘇り　治守
菊枝にも鳴の匂ふや宵　良太

軒下や燃えし清水し岸傍　頼元

涼しさは水に紋ある船場かな　壺公

摂津

杏業えて人聲さし浦の月　季屋

名桜の屋宅井きそめし月の宵　瀬水

船乃昔や月見支の涼し思楽　枕芳

田井細みさき浦色の柳しの形　連枝

寺鼓の日和に定る短祐哉　鶯宝

峰ともりまし来秋のよ聴の友　似元

涼風の相小や桐杉も古住茂　摘文

畑乃香や鶏きねし秋の彼の婦　其隣

ひきしれて往昔ありし名残の桂　卓志

涼しさは綿さ発や溜屋橋　弘美

花井並ぶる雲し船さわり　宗長

伊勢

旅人の茶乃ゆかしき橋立や　波声

尾張

涼し津門高きの坐午時の鐘　湖春

かき霧みの中隠にさまよふ餌さしかな　士前

鶯は高音ききたて膝のうへ　羽州

ひとり見えさく蕎麦ゐる木槿の菊　三楓

小鮒とく子持で似合ふ露可那　流翠

蓮葉は廣しとおもふ水のうへ　禾居

手折らんの柔ら草とおもふ無枯分葉　静居

吹晴れのうち照す花のしや渡る雪　素汲

月影も浅し渡しも夜西明ぬ　醉雨

鶯の風廣がりさえ出て来るが如し　竹鬼

三河

明る秋をいそぐの花落葉の葉　蓮宇

一夜く落の声子待く山のつゆ　李川

行渡る花の葉の揃への夜や稲雀　石芝

しかと出寄不変りも寒　標風

遠江

春風に陰蓮のはえて蘭乃花　十湖

連翹や是が流れをしたし…ほろり　三奏

蓬莱の飾の幣や動る海のかせ　錦堂

藪陰は中々声しミや花に人　斗桂

駿河

涼しさは先に気や露の臺　蒼香

松風の月にもしらる夏木立　杏雨

高き樹の陰に雨や雲の峰　洪水

柳しおかふれ家は何乃夏木立　可柳

甲斐

常方は落葉にちるや宝座　舞女

人の手をいく度かすむ蓬莱ハ　香芸

先春や春ハ高野寺松の花　学圃

蓬莱の出来て来たり雲は山　寸松

手にとるや夏の来ぬとかり藤折　可鶴

水門をあけて仙台しの仙臺　雷石

初雪の降る所に吹り藪乃中　斥良

菜の花の香細うても春日和　惺池

伊豆

河岸柳の芽吹てなり葉藤　遠水

浪ハ秋こに海の出口やうさき川　梧桐

風吹しや穂に[illegible]る枯野への声　三友

森陰くすゝ[illegible]て九ゝ青[illegible]の月　松嶋

相模

石河の瀬音も[illegible]川[illegible]　寿道

晴る秋の[illegible]稲の花　雲霞

すゝしく[illegible]川[illegible]　左京

法[illegible]　富升

[illegible]や[illegible]　芳巴

[illegible]　閑柴

上総

麦蒔や[illegible]　絶山

[illegible]月[illegible]　菁我

出雲[illegible]連や[illegible]菴　一瓢

影しけき[illegible]の山　美津女

松山[illegible]萩に似て[illegible]　陳雲

下総

[illegible]浦伝ひ　旭窓

菜の木年花あかり残るすゞる　鶴翁

嫌はれてきさらぎ庵の月見かな　鈞月

常陸

奥は背にかくれて流れて始まる秋　米雲

美濃

秋立て五尺高し庵の垣　蓬庵

白壁や巻松樹もあるも風はある　弁笠

舟の子や腰までくりよい音も　其磁

野むしや宿有其は夜の枕かな　独交

松への娘に樣に涼んで夏の月　秀和

雁たかき水は涼しや杜若　玄白

信濃

花橘しぼむとも物ゝのゝ寸　其残

山は連て満ち澄みに流れ夜露の岩　省我

降るや先面と待ちて月見かな　香底

梅もう向かう時は一所なり錦葉山子　参扇

茶といふ日数かさねて庵の月　一秀

芭蕉法名高ひいて暮の雨　林桑

江の島はもうしろみへて春の月　採茶女

相の花ちるや家毎にくゝ煙　知淡

河中にまゝは有松の空　木甫

上野

夕くれや麻にも濡れ物ほしき絶　為流

飛ぶ雀よみせきて鷺のゝまゝ蘇　有隣

雨数雲に下ゆく木の間かな　兎石

鳥のゝ羽音もなくて納豆汁　貫海

月よ雪も花も済や松のこゝろ　葉古

人乃まに行る松葉見てを見えけり　乙駘

下野

おとし来る人まで来宗日も霞ぬれ　茂精

初雪にしらまてかけき山路かな　此山

越前

梅花雉の谷のおとや雪の声　如川

加賀

手捕に数同じもひとつしの消沼　壷主

こゝろ数覚ぬみて猪日も来る芒　文然

よりまたや老は菜種をかたげ秋　柏葉

越中

揮宝や凍て川幅ハ躍り出　其流

川の瀬のあらくて添ふ霞かれ　蘇清

葎やからうちあふぎて蔓採り　巻布

越後

雲井ハ海面に霧なり夕鵆　梅岡

雨雲に明けよと送る秋の月　雲湖

雨衣霧は寒山やえ氷魚　雅佛

探ぎめっしてけりや蜆売　文貞

さしのぼる宇木枝露に醒てくる　猶有

牛に鞍着て通るや時鳥　里之

揮煙きはらや其れかにほ達萩　月然

おもひ行く枝稲の明けて稲話　輝巻

八重桜起飛ぶ雁　素公

枯葦のうへ乃無くや蝶あかん　百鶴

佐渡

霞む梅畑に満つ花は青菜かな　収之

咲口をまつしく見るや帯しの花　左　濱水

岩代

折りかへて背山や梅のかほり　松園

蝶とふ花見ふさけて梅の眺めかな　緋燗

妻の梅や折角不在の庵もあき　西義

蝶啼の今味噌のむさし新樹哉　葉五

陸前

江のみどりと見えて春やの庵かな　春宜

招しるゝ出へくなく峰の雲雪かな　松甫

舟遊さしてまかせの夕日かな　如水

行里や雨を忘れし山麓し　沙耕

梅咲やさきしき清の旅　水山

陸中

山深し鳴音はちかし早苗哉　北一

蓑のみゝろに風吹かれ葉かな　天路

羽前

夢さめる月夜の宿も枯尾花　晴山

蝶舞や雛の集に葉桜に　陽山

虹となる時もきえてたつ時雨　可有

飛ありて宿出てのうらまた法初霜　月山

羽後

涼風や行燈きえて流れかし　素山

雪解て廣抜出す小松曳　厚山

鶯乃鐘よりさきに雉子の声　二葉

人のゆくの先を枝とりや女郎花　松守

蕎麦はいまだ中なり木兎の声　江風

残る伸たる手際や蝶の梅　交和

雲の奥は岐きれ岩の山　峰風

江刺

より傍の寒さ身に似たる畑の梅　一昇

涼しさは松の太刀打ちも鰍の聲　紫山

水草の一際高し露の庵　綾石

小松

雨あがるや宮のあかりつる桔梗かな　一瓶

月夕の夜半やや萬に様なれ　如醒

岩鼓

ゆるひに初音てさへ時雨　條柳

周防

家ちかのゝ水もあらはに落葉雀　紫然

様なうきみしる經人や落柳　鹿汝

菜の法さへも経声ありて舟居よせ　鳥牙

出雲

売れいは香法中あらぬ梅の宿　曲川

石見

猶見てゝ人のかはよし夕時雨　静雄

播磨

舟相折若葉を棹にさしゆけり　自斎

備前

遠近や蟲一こゑ吹虫乃聲　源娘

いつかしたり涵あめしゝや春霞　帆最

備後

青柳の運てや雨出其年　梨圭

周防

秋くの水葉の落て上紅牡丹かな　春谷

長門

夏草や小高き所に蟬の声　梅宿

紀伊

月涼や芒結ふ帝の旅まくら　洪水

木常に嬉しく涼しや松葉越　芳丈

淡路

今朝しも風表涼しく吹き結ひて　園栄

阿波

岩槌の筆に拿ふとも画く涼しさよ　桃査

雉子啼や広野に見ゆる風の跡　梵年

あきまつり見る山ある稲の茎　思風

和らかな声しも踊の手　史白

四五日は日和を見えて結ひ綯　控清

なつの出る川舟や涼み舟　秀琳

土佐

五月の淋に括れて垂るゝ青柳かな　五葛

蜻蛉や風涼しまし草の下　如山

秋の野や花さく白萩露の中　青柳

名残おしむ世とはならぬ帰り花　岸夕

肥前

押やらぬ手に雪つもる椙雪崔　山蔵

浪へ出て葛家四五軒露多り　西湖

椽に出て年周中秋の月　逸素

蝶の羽も椋の梢に残る月　月泉

近江

秋は茶の煙の息に山路かな　梅實

来訊ぬ木曽の峰より二十三年　秋蛙

豊前

冬の松やはや宵月の声枯　三津下

秋の出乃露と別りし星の中　千翁

涼しさの人垂る清水出水あり　拙味

手をつれや山まて山は秋いろの森　然二

豊後

花曙は出てや雉蒔の隣なる　乙人

日向

樹の多い里みは上ゝ時雨　流鹿

雪はるゝ夕くれは去りの暮歟　林鳥

武総

下雪干との千門標ゝの年　完路

霞山越扇風團ふ揃ひゝれ　源蛙

鶯や妹まし出て囮出し　一峰

宵月や梅さく門は明けなし　青蛙

菖木の遠さ見ゆるや康の照　自楽

大凡に峰煙の高き水霞けり　升二

足下の目にあてゝしき汐干哉　翠兄

野屋敷や梅に門の離れ家　巻松

神の竹林夜をまつ宮本の鳥ゝ　左助坊

飛水のうち鷗ゝは河辺群に渡けり　友昇

嬉しまつ津にてや霞の音　桃李

声のしてゝ山雀みゝ燃えてなりのれ　一理荘

道草の宮や柳の青ねさき　三巣

ゆふ暮ゝ中に人あふ桜可笑　幼史

綿柿や山と小春の秤なし　市月

冬空ゆ見ゆれに扇さすれなり　可笑

東京

桂葉の出そめしや小六月　　洵亮富

雨雲のとぎれ通ふや稲の露　　永様

秋夕や西に有明薄き影し　　禾暁

筆にのこる余花の蜻蛉の影　　石叟

初雪の来たり松の夜の庵　　萬雄

家のあと桜もおもかげ茶の花　　守山

舞台も初めのうちめでたしと　　鶯笠

口切や出て侘しも出てゆく　　是三

初月や松葉の影のことし　　默坪

蝉声や鋒の先まで追ひかけり　　精知

鹿は揺れ頭も初時雨　　林甫

見に合ふ世もなしに枯枝の花　　桂花

樹を拝揖す更に経済　　嘉石

虫の音に訓読く揺れ行　　呉仙

去り行く水の誰と紅葉　　壺海

名月や声暁の鐘の声　　蕉慈

鯉に渡る揺れて紅葉　　芳泉

秋の川や先はしる水尾哉　　相宗改　陀左

さ移り遠く雲に付たる時雨　謝徒
夏の月さし込む雲のかくれ家の　五仙
篝火に来る虫にけ法師の葉越し　筆兒
紅白の山茶花へて罌粟終りの丸　竹舎
五月雨のころの夢いつも嵯峨の月を寸　月庵
冬枯の露の寒さや清水の庵かな　晩支
出なり菊露の習ひや萩の露　武甥女
蜂の子やかの鳴もしもの錦のち　蕉窓
日の暮や煙の中しぬ枯尾花　諸生

秋風しやさ葉かれし水の蓮の花　雲一
夜もすがら寒ける月や涼しき　四友
夏鶴やいつも夜の月に照りける　丘雀
涼しさや浮しめや緑のしら戦ぎ　宗丘
初しの花風吹きの葉　西呂
虫の夜の露かと声のしみけり　梅濱
番ふつる涼みの物語　金羅
小春日の時雨横きる松の雪　子雅
河骨の咲くけ水をさしかれけり　鷺一

梅か香やうれ高の西ふし　宜女

狂かしきひのとやうれしき月の月　梅岐

萩の好む人の務かな水音　菖無

雲霧遠く隔つるの後ろ柳かな　回子

梅の葉は落ちてさなへ月の前　乙雄

春おしむ雲のはれ急かし枯柳　秋江

稲妻やさしおかせたる浅瀬川　逸也

雲はらし夜さへさかりや宵の月　桂五

松原の春来てさみて緑まつる　静山

梅笠の初音聞かむ情捨人　長山

猫宮殿ありとぞ神嫁菜　山月

雑乃出では初るや乗恵士　雨雲

霧にさへ見る伊勢紫緑かな　千竹

雨傍いつ雲とれて月の影　十才 きの女

蓮そろや先輩の若きよきを　枝山

時雨人家のうへ鳴る可南　為喜

よし柳や花の蕊しも宗河　朴隠

深き鳥とおりてく緑のかな　蒔廣

椎結ふ庵しきとまて晴ゝ松の葉かれ　木和

晴きりてあらしに降る時雨かれ　梅年

木枯に行て帯にかわく坂ますの峰　鉾雄

ありたけの峰ふき尽て木葉かな　三千雪

鶯やゆきにかゝ出て室二日　正竹

我のけにありみる花や末木槿　千蔵

松のみ音勝よ寒し郭公　重松

穂の蓬着にきる足よ去年味　去年

笠蓑道隠ある濡て時雨　素水

清ふ声いふし寒し堂の松　沙山

翁　霊前にぬかつきて

世の中に二るゝ冬ありしくれかな　枝雅

松風の時雨や息て山の月　由之

笠とりて見ある雅結志遠かり　花解

時雨てや粉も添しの宵もしくれ　桂風

菜時雨冬し古びや葉の落　孤村

今や降袖の紅しくれかな　ぬれ女

しぐれや茶挽時雨や翁の日　常久女

稀ゆゝしき書にし時ぞ序

素女

さるを当国中山に芭蕉翁の碑を
建立せんと催されし大高元雅の
厚き志を感じて

時于こゝに
翁乃年有ゑ古希里

于我

碑を建筆を染て
祖翁のこゝろを法さ慕する
大為斎の信心を
猶契して

葉のみなし梅の露にも
云ふ方涼しまれ

武湖 （印：武湖）

祖翁二百年忌抔にあたりて
句碑を建まつり追福の集を
撰む寸篇山夫鶴子が志抔
随喜して

影ふるき石の苔涼しまれ

春歌 月之本 （印：為山）

翁の二百年忌に
さかゆく葉の廣さし
教へを識なりて
二百年七志られ
いさゝし芽種　桜蔵

翁の肖像をいつくしむも余の秘蔵なる肖像は
下野の国粟津義仲寺において時雨会のとき
蝶夢和尚阿弥陀仏様より拝写して拝する所
なり筆たしかにありて見しき事やあらん
の飛乃末の家とかへるを画像の人は装束を寄せる
一紙にしるして拝す翁の真筆なれば様式ハ宗祇
[illegible]宗匠[illegible] 三千風宗因季吟其角嵐雪
あまた十哲など更なる言はずも代々の宗匠
あまた二百年に及び此の人々の数へもおほかる
もしは思ひ出しとしかるべき自ら文して人
情をかしひかるの面影も幸にしてこの供養を

年〻はなさかん神像にぬかつきて廿三忌
を懺悔して香を拈くもし
西行をいつま拝み初しるれ
時あらたに世のならひなかすて一輪
筆を執えてるや来毎に懐しくて

大島老人

因に老松と云事を記し物のそへて
太陽暦明治九年一月十日に太陰暦十二月一日に
當りて當社中梅花より末社より當社傍出る中穂枝際く
と降積りて七日の暮の雨により雪烈しきれハ余六十の二坂
に秘蔵と足といさゝ二つの舞と見えし僕をはけまし合せ
み年末社田明神の山にをきて社中をるし末社毎年順
なし年奥山社風情東車の應りしはしてしを也
の株我分ち成を樹弁乃し雪霞樹との性来にはもを
生風京乃え年絵のくして末の筆を染めし給て

吹おろす又嶺の松風は吹雪の外
庭のおもて表坂下里まで行は湯島天神山の花さかり
参詣坂中程より見れは積る雪は流れ(?)て花は今も
其我言は都(?)り社前を離し東南の風景明神山なる
しら雪おもしろく降(?)津(?)けりしに
埋(?)もれ梅の匂ひや雪の原し
其坂より池の端に出通(?)るは池は西方の雪見におもし(?)
鋪(?)のあたりも水しみて雁鴨は数なく氷り付てなる(?)海(?)
深森島は長く見て世の中(?)きまて言成り

吹雪も花と積(?)もれは覚ん(?)誘(?)ひ(?)深森島
上野山我巡り清水堂に拝し出て見わたし　秋色の古
手古句は出(?)すの井右(?)蝉の法(?)この木我に成り
いでや雪見もさえ元(?)之　京(?)さへ(?)よ(?)ろ(?)
雪は降(?)りて鐘は寛(?)もとゝろみなり
不忍(?)上野は凡(?)京茂林松成は当世界中(?)まて
見わたせる池中の渚る風情且は東南の遠見ぞ(?)
降り雪見すまじし時(?)中は樹木は雪に彩りける
風情なれて車坂加里やの浅草観音(?)にまで

此日残雪奥山ぶみやり東椎(あつまだし)を登りて三国(みくに)神社
拝し去年一本は梅咲初むる程は
神の梅更に残雪の白きを見
残雪は香越梅乃仕れ
残雪の花は残りの冽敷鳥
牛の店前を出て浅田坂をたどりて残雪
の所へして小坂を通り白雪は上手く
降積し雪の尺四五寸も見え過ぎ或は樫樹の遠写
くく見え渡りして陸(おかうへ)雪は弐尺も有るもの也

人とても後れし雄々しき人等基洋拝む
巡豊成薩へし一人
逢ひし時家郷雪の果てより梅社寄せ
さして梅も川 み

軒下は軒先雪解して人
雉向きて残雪の脈は有り
雨降りや残雪は川
田の畔は川沿の残雪
花残り雪の果て残雪

梅ヶ社尋梅記

梅枝本梅子老人の残雪への事

是は法花経の菩提の為に阿弥陀の像たまはり

仏前の経をもて是を供し其後人々像経を以て人来る人々

来て経を一巻づつ供養ありて法華経を左手に小梅

村をしてとりて深川さしての無仏寺成りける法を施す事なく

自然来りて梅を出す事ある所村をもしとりて頃を尽く

今迄々人の思ひ出かなく雪は山花かくやかうんと一返

梅に出行（あゆみ）実（げ）に細けて十出の先の本経の出して雪の

時哉新年まりあの花の枝の折りて出る体たん然無

道しるべは辞退とたとえ花を雪の色

二十八日は雪は止みて庵中の樹木も中々に埋もれ

起りて来て白き梢や雪の声

揃ふ雪は下枝満てつ花乃春

梅さくや花の新月の空細し

庵より廿九日は雪はみるや雪の滝と消なれは

雪の日や鳥井の柱のしるけり

今日は又新しく候へ雪への雅

郷の雪見んとて来ぬれは表筆ありて寒流に抽ふ

角し越し行きをれ

大寿

大雪なりし雪見んの跡をよみ遊びて

峰雪もまれの輪なる雪見んの丸

七十二齢

月の本為山

昭和 14